パプア・ニューギニアにおける民族考古学的調査

高橋龍三郎
細谷葵
井出浩正

はじめに

従来から、先史考古学の分野では、先史社会を解明するにあたり、多くの自然社会の民族誌を参照してきた。縄文社会のように、遙か昔に過ぎ去り、二千数百年後の現代社会にはもはや断片といえども余孽を残さない、完全に失われた社会を復元するには、それがいまだに機能している現実の社会を観察し、比較する方法が望まれる。

筆者等は、日本の縄文時代の社会を復元するにあたり、文化的・社会的にほぼ同等の複合度と目されるパプア・ニューギニアの民族誌に注目し、考古学的に必要なデータを収集することを目的に、二〇〇二年八月一七日〜二四日にかけて、パプア・ニューギニアのマウント・ハーゲン地区を巡検した。本稿は、いわば考古学者による民族調査の記録である。最初に、民族調査の必要性と可能性について述べ、次に調査で実施した聴き取り調査をもとに、マウント・ハーゲン地域の親族構造と多部族の祭典、「シンシン」について報告する。最後にそれらの民族調査および社会複合化理論が将来の考古学的研究に与える可能性について展望したい。

一　民族調査の必要性と物質文化

自然社会において、地域社会の基礎単位は、一般に構成員が所属する親族組織（リネージ、クラン等）、地縁的組織、結社的組織などである。縄文社会のあり方を知るには、縄文時代の親族構造や縁組み原理、地縁組織としての集落構造を知る必要があり、それを自然社会のそれらと比較することが肝要である。

パプア・ニューギニアはシンプルな平等社会でなく、ビッグマンやヘッドマンと呼ばれるリーダーが出現する社会として知られている（Godelie 1982）。彼らがどのような社会的契機において、複合化、階層化への歩みを開始したのか、換言すれば一人の傑出したリーダーが親族組織、地縁的組織から出現する過程において、内部でどのようなメカニズムが働くのか、またそれを促す社会的契機として、祭祀や儀礼のもつ意義について、民族例を通じて深く知る必要がある。これらはいずれも縄文社会においても断片的には確認されるもので、それらを知る事は縄文社会の複合化の過程を考察する上で、重要な課題なのである。

社会が複合度を増すにしたがい、経済活動のみならず、儀礼や祭祀など人間の諸活動が活発化し、さらに集団と集団、人と人を巡る関係が複雑化してくると、情報の流通や物質的側面において、質量共に集約化し、新たに多様性を生みだす傾向が指摘される。社会の複合化は同時に社会の階層化と軌跡を同じくすると考えられるので、物質的な側面からの接近が可能になるのである。一般にバンド組織などの一般的狩猟採集民は、移動生活とも関連して、物質文化的には貧困である事が知られている。生活に必要な最低限の物質文化しか保持しない。また無頭社会とされる一部の部族社会においても、傑出した政治的リーダーは不在で、集団を集約的、組織的に指揮することによって可能な大規模な建設事業や、リーダーが所有する手の込んだ物質文化は生まれにくい。おそらく、それらを保有する縄文社会は、バンド組織が織り成す平等社会から脱却して、首長制社会に向かう段階、即ち階層化過程のある段階に相当する事が予想されるのである。これらの物質文化からの理論的接近が可能であるならば、考古学からの接近に道を開く事になるのである。

二　パプア・ニューギニア

パプア・ニューギニアは面積が四六・二万平方キロメートルで、世界で二番目に大きな島、ニューギニア島の東半分を占める。東経一四一度線を境界にして、インドネシア領イリアン・ジャヤと接する。緯度が南緯三度から一一度の間にあり、熱帯雨林気候の中に加えられる。特に海岸の周囲は低地帯をなし、高温で多湿な環境にあり、そのために多くの熱帯植物や動物が棲息する。しかし、高原地域は海抜二〇〇〇メートルを越え、ウィルヘルム山（標高四五〇八メートル）などの頂は万年雪に覆われる。人口は五一三万人を数える。島内部に六〇〇を越える多くの言語集団が生活し、ヤムイモ、タロ

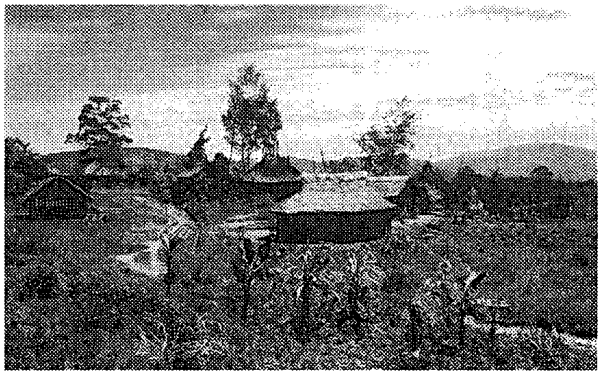

写真1　高原地帯の村落と農地

イモ、サツマイモ、サゴヤシなどの栽培と育成を行いながら生活している。古くから焼き畑による農耕が知られ、高原地域の大部分は山の斜面に至るまで耕地化されている。一説によると、数千年前には根茎類栽培の証拠となる排水用の溝が発見されるなど、世界でも屈指の農耕発祥地として注目されるに至っている。言語学的にはメラネシア語で、オーストロネシア語を主体とするポリネシアやミクロメシアとは異なっている。多くの部族組織は互いに言語を異にして、日常会話が通じないことも多い。公用語はピジン・イングリシュがあり、通じない言語集団間の共通語となっている。

三　オセアニアの人類学的調査の歴史と社会進化理論

パプア・ニューギニアを含むオセアニア地域は、アフリカや北米北西海岸と並んで社会人類学的研究によって、人類社会の進化理論が打ち立てられて来た地域である（Strathern 1971, Meggitt 1971）。欧米列強国の植民地政策と関連して多くの民族調査がなされた。一九五〇年代以後の調査・研究の中で、I・ゴールドマンによる社会の複合化に関する一般化（Traditional, Open, Stratification の三分類）（Goldman 1955）や、M・サーリンズによる環境要因や人口規模などの生態学的要因と、社会的・政治的進化との相関を求める新進化主義的研究（Sahlins 1958）など、多くの研究がなされてきた。これを受けて、考古学でも先史社会の階層化の程度を民族理論と対比する試みもなされた（Renfrew 1991）が、かなり大雑把なものであった。

従来、社会の進化に関して、部族制社会から首長制社会への進化を二分法的に論じたり、ビッグマンと首長制との社会的差異を論じたりする傾向が強かった（サーリンズ一九七六）が、近年では、M・ゴドリエによるパプア・ニューギニアのビッグマン、ヘッドマンの発生と役割に関わる理論的研究が推進され、贈与や女性交換のあり方、性差別やイデオロギー、戦争、所有のあり方などとの関連から読み解く研究が出現している（Godelier 1982）。

また、日本の吉岡政徳氏によるバヌアツでの位階階梯制度の研究では、ビッグマンと首長制との間に、位階階梯制を置く主張（吉岡一九九三、一九九八）が見られるなど、従来の単純な発展論から一歩抜け出して、新たな階梯指標から階層化の軌跡を探る視点が提供されるようになった。これら新たな人類学の研究成果に立脚して、B・ヘイデンは、ビッグマン制から首長制にいたる過程を、階層化の途中にある社会、即ち「階層化過程の社会」（Transegalitarian society）として位置づけ、三段階に分けて考察し、意欲的に考古学との対比を試みている（Hayden 1995）。

一般に、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシアの順序で階層化が進展しており、特にポリネシアはハワイやタヒチにおいて首長制社会（chiefdom）、あるいは王国（kingdom）（Kirch 1984）が形成された地域として著名である。

島々で個別に研究された成果を繋ぎ合わせて、社会進化の一本の筋道を立てることが近年になっても重要な課題になっているが、社会の階層化過程の要因やプロセスは必ずしもすべてにおいて共通しているのではなく、多少なりとも地域独特であったり、島ごとに個別の要因が作用し、その特殊性を解釈すべき事も理解されている。

それらの社会進化の各階梯がどのような基準において区別されるのか、その結果、どのような社会進化の理論化がなされるのか、また各階梯が具体的にどのような順序に編成されるのかという問題と共に、それらの違いがどのような要因でもたらされたのか、などの考究すべき課題が山積している。

日本人の研究も注目され、牛島巌によるミクロネシア・カロリン群島の調査（牛島一九八七）、山本泰・山本真鳥のサモア調査（山本・山本一九九六）、吉岡政徳のバヌアツ調査（吉岡一九九三、一九九八）などで得られた成果では、様々に発展の段階を異にする諸社会がいずれも、親族組織や地縁的組織、結社組織をベースに階層化が進展している点が注目される。そして、それらの地域的リーダーが、位階なり地位を獲得する過程で、祭祀や儀礼が果たす役割が甚だ大きい事が指摘され、その機会に行われる食料や物資の再分配が重要な意味を持つことが指摘されている。それら祭祀・儀礼の機会に消費すべく、彼は親族成員を動員して、時には消費を切りつめさせて祭祀に必要な食料や贈与物を集積し、再分配するのである。

さらに社会の発展に大きく寄与する野心的個人の出現の問題や、個人が祭祀・儀礼を通じて党派を形成し、贈与関係や流通網の掌握、婚姻の取り持ち、融通を利かせた個人的紐帯の確立などを目論んで、多くの支持者を獲得する過程は、社会の複合化過程、階層化過程を考察する上で、大変重要な要件なっている。従来から、パプア・ニューギニアを中心に、モカ儀礼やティー儀礼など、社会的紐帯の形成を考える上で重要な儀礼の研究もなされてきた（Strathern 1971）。

（高橋龍三郎）

四　親族構造の調査

「フィールドワークにより得られる資料は、結局は人類学者の現地での「経験」にある」（小泉二〇〇一）。そしてインタビュー調査は、現地の人々との対話の形でかれら自身の現地社会に対する考え方、暮らしの感覚を知り、また調査者自身もそれを通して相手文化を感覚的に理解できる、重要な調査法である。今後の筆者らのパプア・ニューギニア調査でも、力をいれていくべき点のひとつといえよう。

今回の調査では、マウント・ハーゲンのエアポート・モーテルに勤務するモーゼス・リパ氏（Moses Ripa 六四―六五歳）およびドナルド・コイヤチ氏（Donald Koiyati 二五歳）に、ドナルドの通訳でインタビューを行った。エアポート・モーテルは、ともにポートモレスビー大学卒である会計士のマイケル（三九―四〇歳）と弁

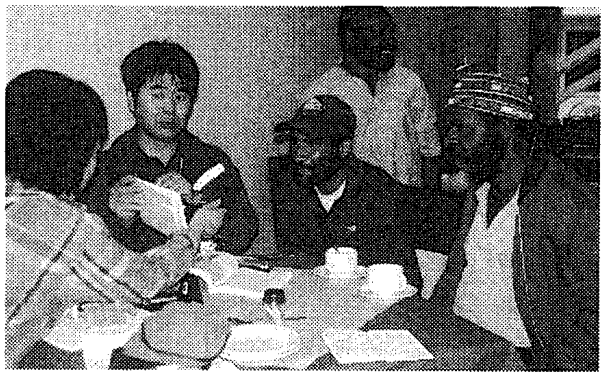

写真2　聴き取り調査
（右がモーゼス・リパ氏、右から2番目がドナルド・コイヤチ氏）

護士のイメルダ（三五歳）の夫婦が経営しており、モーゼスはマイケルの伯父、ドナルドはイメルダの弟という関係である。モーゼスやドナルドはモーテルに住み込み、必要に応じて宿泊客の運転手、ガイドをしたり、食堂のウェイターをしたりという勤務形態をとっている。インタビューには、ドナルドの父ブリキ氏（Buriki 職業は教師）も途中から加わった。

トライアル的な短いインタビューではあったが、今後の調査の方向性について多くの示唆を得ることができた。その内容は以下の通りである。

1　インタビュー概要

(1) 民族構成

マウント・ハーゲンには一〇〇以上の部族（tribe）がいる。人口は、空港付近のエリア（ハイランド東部）で四万人、ハイランド西部で五〇万人である。

モーゼスはヤムカイ族（Yamkai）出身である。ヤムカイ族の総人口は一万五〇〇人で、ペプカイ（Pepkai）、マプゲン（Mapgen）、ヤトナム（Yatnam）の三つのクランに分かれている。このうち、ヤトナム・クランが人口三五〇〇人と最も大きく、七つの村がこれに属する。モーゼスはそのうちのひとつ、人口一五〇～二〇〇人のコンダー村（Kondae）で生まれた。各村には村長がいるが、コンダー村の現村長は、モーゼスの長兄マカプ・リパ（Makap Ripa）で、彼はエアポート・モーテルのオーナーであるマイケルの父親でもある。ペプカイ・クランの村は六つ、マプゲン・クランの村は四つある。クラン同士は仲が良い。

クランごとにもまた、リーダーがいる。現在のリーダーは、ヤトナム・クランがジョセフ・ラット（Joseph Rat）、ペプカ・クランがチャールズ・ケンケン（Charles Kenken）、マプゲン・クランがルー・ペブ（Lou Peb）である。リーダーは、五年ごとに選挙で決められる。

一九二〇年代当時のクラン・リーダーでモーゼスが名前を覚えているのは、ヤムカイ族の中心的存在だったネントパ（Nentpa、セカンド・ネームは忘れたという）、彼の後のケラ・ネマ（Kela Nema）、ポク・クム（Pok Kum）、ペブ・ポプ（Peb Pop）などである。彼らリーダーは、たくさんの妻、土地、ブタを所有し、豪勢な暮らしをしていた。このうち、ネントパは二〇〇一年まで生存していて、一〇三歳で亡くなった。現マプゲン・クランのリーダーであるルー・ペブは、ペブ・ポプの息子（二男一女のうちの次男）

である。

（2）言語

マウント・ハーゲン地域の主要な言語グループは、メルパ（Melpa）、ミディーワギ（Midi-Wagi）、タンブル・ナイペラ（Tambul Naipela）、エンガ（Enga）の四つで、モーゼスはメルパに、ドナルドはエンガに属する。お互い通じる部分も通じない部分もある。

（3）婚姻

結婚は異なる部族の者同士でしなくてはならない決まりになっている。男性は生まれた村に残り、女性が外から輿入れしてくる父系制である。

結婚にあたっては、新郎の家族から新婦の家族へ婚資が贈られる。その内容は、

①ブタ（貧しい家族なら一〇～二〇匹、裕福な家族なら三〇～四〇匹、ブタ一匹は五〇〇キナに相当）

②五～六〇〇〇キナから四～五〇〇〇〇キナの現金（かつては貝が贈られていた）

③バナナ、イモなどの食物

④特別に織った敷物や陶器などの道具類

となっている。ブタや現金の量はその家族の貧富の差によって変わるが、男女の貧富の差が結婚の支障になることはない。婚資は新郎の親戚一同が協力して準備することになっているので、親戚が縁組みするたびに物入りである。

「結婚式」をあらわす言葉は、モーゼスのメルパ語ではAmb（=妻）Kama（=婚資）Morogo（=与える）、ドナルドのエンガ語ではEnta（=妻）Mena（=ブタ）Kana（=現金）Mailamon（=与える）で、どちらも「婚資」を強調した言葉である。

結婚式は、五～六〇〇人が集まる盛大なものである。多くの人が集まるほど、多くの婚資が贈られることになる。

（4）家族

①モーゼス・リパ

モーゼスの一族はこれまで八代続いていて、彼の息子が九代目になる。モーゼスは代々の当主の名前を、初代を除いてすべて暗記している。ポンプ（Pomp 二代目）、カイル（Kail 三代目）、カンビル（Kanbil 四代目）、モコプ（Mokop 五代目）、パルギ（Palgi 六代目）、そしてモーゼスの父リパ（Ripa 七代目）である。リパは一九五八年に亡くなった。第二次世界大戦中の一九四二年頃には苦労した人である。祖先崇拝の信仰は以前は存在したが、キリスト教伝来以後おとろえた。

名前については、いわゆる名字にあたるものは存在せず、それぞれの父親の名前を自分の名の後にセカンド・ネームとしてつけ、名字のようにして名乗ることになっている。モーゼスの父の名はリパ

なので、モーゼス・リパという名になるわけである。モーゼスの息子であるピーターは、ピーター・モーゼスと名乗ることになる。

モーゼスの母ケニ（Keni）は、ハーゲン・タウンの反対側に住む、ディガイ族（Digai）という大きなグループから嫁に来て、モーゼスを含む四男一女を産んだ。ケニにはロンブリ（Ronbri）、ノマ（Noma）という名の兄弟二人と、二人の姉妹がいる。

モーゼスの兄は、マカプ（現コンダー村村長）、ロン（Rom）の二人で、下にはコット（Kot）という弟とラキラ（Rakira）という妹がいる。マカプの妻はペプカ出身、ロンの妻はムネビ族（Munebi）の出身である。妹のラキラはラムジ族（Ramudi）に嫁に行き、代わりにラムジ族からコンダー村へ嫁が来た。しかし、グループ間の女性の交換という考え方は特にない。ラムジ族は車で二時間、二〇キロメートルほどの距離にある（注：ニューギニアは道路事情が悪いため、車の速度は非常に遅くなる）。

モーゼスの妻メリー（Mary）は、ワギ渓谷に住むミディ―ワギ族（Midi-Wagi）の出身である。大きいグループで、モーゼスたちとは異なる言語を話す。夫婦の間には、息子のピーター（二一歳）と娘のメリンダ（一五歳）がいる。家では六匹のブタを飼い、庭でカボチャ、サゴヤシ、キャベツ、アビカ、トウモロコシ、シダ（緑色野菜として食べる）、ビルム（ワラを利用する）を栽培している。また、山にはバナナ、ジャガイモ、ヤムイモ、タロイモの畑（long fields）を所有している。

②ドナルド・コイヤチ

ドナルドの父ブリキ（なぜこの場合ドナルドのセカンド・ネームと父の名が違うのかは不明）は二度結婚しており、一番目の妻はキブン族（Kibun）、二番目の妻はワンギン族（Wangin）から来た。ドナルドは一番目の妻の子である。

ドナルド自身には、プリシラという名の妻がいて、妊娠中である。彼女とは、町で知り合い、恋愛の末結婚した。最近ではこのような自由恋愛結婚が一般的だということである。結婚相手は他の部族の者でなくてはならないという規定はあるが、他部族の女性と知り合う機会は多く、困難は引き起こしていない。

2　調査結果についての考察と展望

以上のインタビュー調査から得られた成果および今後の展望について、以下項目ごとにまとめてみたい。

（1）民族・言語

ニューギニアは多くの言語があることで知られ、その数は五〇〇とも六〇〇とも言われてきたが、言語調査が進むにつれて整理され、現在相互関係のわからない言語は約三〇〇である（畑中一九八九）。小言語族であることは、権力の集中がおきなかったことにも関連する（大塚二〇〇二）。

今回のインフォーマントのモーゼスとドナルドは、それぞれメル

パ語族とエンガ語族に所属した。メルパ語族は東部ニューギニア高地ストック、中央語族、ハーゲン亜語族に属し、約六万人のグループである（柄木田一九八七）。エンガ語族はメラネシア系とは独立にできあがった、一一の言語グループを内包する約七万人のグループである（Godelier 1982）。

同族結婚を禁じるニューギニアの婚姻システムでは、異言語族の親戚づきあいが日常的であると思われる。このインタビューでは、そうして縁戚となった異言語族の二人が、「（言葉が）通じたり通じなかったりする」と言いつつも、大過なくコミュニケーションしている暮らしの様子を見ることができた。

言語グループの組み合わせしだいではコミュニケーションに苦労することもあるのか、結婚相手を選ぶのにそれが影響することがあるのか、また新しい共通語としてのピジン語の導入がその面で社会変化をもたらしたのかなど、今後さらにインタビューによって調査していきたいところである。

（2）姻戚関係

リネージや婚姻についての問題は、今回のインタビュー調査の主題であった。結果、多くのテーマが浮上してきた。

婚姻システムについては、女性が輿入れしてくる父方居住婚であること、同族結婚が禁じられていることが確認できた。典型的父系制社会とも見えるが、これについてバーンズは、ニューギニアのケースで注意すべき点として、地域コミュニティには非男系成員が多数見られ、その中には有力な者もいると指摘している。すなわち、コミュニティへの帰属は必ずしも男系の血統によってのみ強制されるのではなく、個人にある程度の選択権もあり、また女性も、嫁ぎ先だけでなく生まれた集団にも利害関係を持ち続けるという（バーンズ一九八一）。確かに、筆者らの今回の調査のケースでも、エアポート・モーテルの嫁であるイメルダの弟や父がモーテルに同居しているのであり、女系の血統もコミュニティの形成に大きな意味をもつ事実が見受けられた。表面的な婚姻システムによって単純に社会構成を判断することなく、実際に何がおきているのかの観察も注意深く行われなければならないことを示している。

同族結婚の禁忌については、吉田（一九九二）にも、同族の女性と恋愛し結婚した男性が、「ブタやイヌのように妹を妻にした男」とさげすまれたという一件について述べられている。しかし一方で、このような事態もありうるということであり、禁忌にかかわらず同族の男女が恋愛するというトラブルについて実際どのくらい存在するのかは、今後のインタビュー調査で得たい情報である。とりあえず、今回のインタビュー相手であるドナルドは、そのような事態は起こり得ないかのように話していたが、それはよその人間に対する「建て前」という可能性もある。同族結婚を恥ずべきことと考えているのならなおさらだろう。インタビュー調査が難しい側面のひとつである。

また、パプア・ニューギニアにおける一夫多妻制についても、現行の風習として存続が見られることが、吉田（一九九二）などに記されている。しかし、キリスト教の影響などもあり、女性側の心理として受け入れがたいものになりつつあること、それが一夫多妻を甲斐性の証と考えがちな男性の感覚と相容れず、揉めごとの種になっている現状も報告されていて（吉田一九九二）、廃れる方向にある習慣のように思われる。今回のインフォーマントであるモーゼス、ドナルドの両氏とも、複数の妻がいる様子ではなかった。ただ、ドナルドの父ブリキが「二度結婚した」というのは、二人の妻をもっているということなのかもしれない。プライバシーの問題もあり、一回のインタビューではその点をあまり深くは聞けなかった。

ドナルドの姉イメルダが大学を出て弁護士の資格を取り、現在は夫とともにモーテルを経営しているという事実は、現在のパプア・ニューギニア社会で女性の地位が必ずしも低くないことを示している。ただし、それは一部の階級だけのことである可能性も考えなくてはならない。

婚姻の主体をなしている婚資については、その多寡が結婚の障害にはならないとのことで、重要ではあっても厳密な「交換」概念に支配されているものではないようである。「親戚の結婚が続くと物入りだ」などというぼやきには、日本のご祝儀などと同じ、すでに慣習化したもののやり取りを感じさせ、親近感がわく。

（3）系図の概念

モーゼスによって彼の前七代の父祖の名が披露されたが、これはどうやら、彼の父とその前くらいまでは実際の血縁者の名でも、それ以前は直接の血縁者というより一族全体の先祖の名で置きかえられているようであった。バーンズが「父系遠祖の名前は忘れられる。またはそのかわりに、集団の系譜構造が、現存成員からおよそ三世代上にあたる多くの兄弟群までの、男性による単一の（二重のこともある）下降ラインのかたちで示され、それらの男性の兄弟姉妹は記憶されない。さもなければ、現存する分節に名前を与える推定上の遠祖と、現存者の父の父、または父の父の父との間には、明示できないようなおおきな隔たりがある」（バーンズ一九八一）と分析した状況と同様であると思われる。二、三代前までの現実の父祖の名に、半ば伝説的な一族の先祖の名を組み合わせて自らの「系図」とする概念は、日本の古墳時代の鉄剣銘などにも見られるものである（武光二〇〇三）。より調査例を増やし、こうした系図概念の普遍性を調べる必要があるだろう。

（4）農作

モーゼスの家族は、ブタおよび菜園、山の畑を所有しており、平均的なパプア・ニューギニア家庭であるといえる。今回は農作業の調査はほとんど行わなかったが、将来的には畑の現地にも連れていってもらうなどして、土地所有の概念や耕作スケジュールについても

調査を進めたい。

3　今後のインタビュー調査に向けて

今回の調査では単発のインタビューしかできなかったが、得たものは大きく、インタビュー調査の有効性を再認識できた。

今後のより充実した調査のためには、質問の内容をより精錬するのもさることながら、インタビュー対象の幅を広げていくことも肝要だろう。ただしそれにはいくつかの乗り越えるべき課題もある。まず、特に婚姻問題などについては、ぜひ女性の立場からの考え方も聞きたいところだが、今回は現地の女性と会話する機会が非常に少なかった。女性が外部の人間と気軽に会話できないような社会的規範があるなら、インタビューのためには何らかの対策が必要である。女性である筆者などが話をすることで解決できる面もあるだろうが、女性に対する社会的規範は外部から来た調査者にも適用されることがあるので（松沢一九八三）、まず状況をよく理解しておかなくてはならない。

また、インタビューの意図そのものを理解してもらうのが、一部の知識階級以外にはなかなか難しい現実もある。筆者らも、本稿で紹介したインタビュー以外にポート・モレスビーのホテルの従業員にもインタビューを試みたのだが、英語は通じるのに意図がどうしても伝わらず、断念せざるを得なかった。また、知識階級は知識階級で、あまりエリート階層だと「研究対象」としてインタビューされることにプライドを傷つけられる可能性もあり、慎重な対応が必要である。

いずれにしても、効果的なインタビューのためには、時間をかけて現地の人々と接し、事情をよく理解した通訳者なども見つけていくことが不可欠だろう。

（細谷　葵）

五　祭祀の調査

1　シンシンの概略

パプア・ニューギニアにはさまざまなシンシンが存在する。シンシンとはピジン語の singsing がなまってできた語といわれいる。Singsing は一般的に歌や踊りを指すが、①踊り（饗宴を含むこともある）、②呪文、歌、吟唱、儀礼的聖歌、③体を揺り動かす、揺り振る動作等を含む一連の動作大系とする意見もある（畑中一九八九）。シンシンは元来単なる「どんちゃん騒ぎ」という性格としてではなく、集団内や集団間における通過儀礼、交易や儀礼上の訪問、儀礼的贈与交換などの諸儀礼の一過程を担っている場合がほとんどであった。したがって、シンシンには個々の集団を示威するような装飾や形態があり、槍を抱えて列をなして行進するものもあれば、後述するマッドマンのように不気味なほど物静かに、そしてゆっくりとパフォーマンスをする集団もある。シンシンが集団間の紛争における戦闘態勢を示す、あるいは威嚇作用をもつといった性質があ

るのかもしれない。

しかし、パプア・ニューギニアの独立以降は、国家レベルで国賓の歓迎や建物などの落成式、パプア・ニューギニアの独立記念日を祝うときなどに壮大なシンシンが催すほか、例えば個人がガソリンスタンドを竣工したときに簡略的に行なうなどの、個人的かつ限定的な出来事にもシンシンが行われるようになってきている。また、今回筆者等のパプア・ニューギニア訪問の主目的のひとつマウントハーゲンショーなど、外貨獲得のための観光資源として国家が組織的に運営するものも多く、もはやイベント性抜きには語ることができない段階にきているといえる。いずれにせよ、シンシンはその行為目的や手段を変化させながらも脈々と現代まで息づいているパプア・ニューギニアの文化現象であることは確かなようである。

2　事例報告

ここでは、今回筆者等が実見したマウントハーゲンショー、訪問したムラで行なわれたシンシン、アサロ渓谷のマッドマンショーについて個々に述べることとする。

(1) マウントハーゲンショー

マウントハーゲンショーはパプア・ニューギニアの中央高地に位置しているマウントハーゲンで年一回ほぼ八月の第二週目に行なわれる多部族からなるシンシンである。マウントハーゲンショーの歴史は一九六一年の当地で行なわれた農業博覧会まで遡るという。そのとき様々なムラからそれぞれ身体に特徴的な装飾を施して結集し、各々が練り歩いたところとても評判がよく、いつしか旅行業者が農業博覧会を部族のまつりとして売り込み、今日のように内外から多くの見物人が往来するようになったのだという。そして現在では観光省が直接運営しており、シンシンに参加する団体には賃金が支払われている。

マウントハーゲンショーの会場はマウントハーゲンの中央のはずれにある広大な刈り込みのなされた平原であった。およそサッカーコート二面ほどの本会場の脇にはさらに広い草原があり、そこでは各集団がシンシンの練習や、休憩、衣装合わせなどを行なっていた。基本的には本会場の周囲に鉄線が張られてその範囲内をプラカードを持った人物の後につづいて各集団がそれぞれのパフォーマンスをしながら練り歩くという形式をとり、見物客がそれを取り囲むのである。見物客の多くは地元の人間か、もしくは「内地」の人間であり、海外の観光客はオーストラリア人、日本人が多いようであった。

写真3　マウントハーゲンショーのエンガ族

このマウントハーゲンショーは一応の開始合図があるものの終了合図はないらしく、地元民によれば、疲れたり、飽きたらそれが終了のきっかけなのだという。また、毎年決まった集団が参加するのではなく、年毎にショーの規模は異なるようである。会場周囲では露店の類が並び、さながら日本の縁日のように賑やかであった。

次にいくつかの例を挙げてみたい。パプア・ニューギニアの一般的な装飾は、男性の場合、上半身裸の上に赤色やこげ茶色の染料を塗り、頭にゴクラクチョウなどの羽飾りをつけ、胸にはブタの牙を用いた胸飾りやコヤスガイなどの幾重にも並べた首飾りを下げ、そして腕や下肢にも装飾を施す。顔面には集団ごとに多様な化粧をしており、その色使いで集団を区別できる場合もある。また、片腕には手斧と手持ち用の太鼓を携えることも共通しており、斧の代わりに木製の槍や弓矢を持つ集団もある。集団内の男性間には大きな装飾品等の差はなく、統一感があるものの胸飾りなどの細部においては相違が認められた。このことは、もともとこれらの装束が儀式や戦闘の際の正装であるとともに、集団内における個人の位階を示す示威の役割も兼ねていることに起因するのであろう。

女性の場合も基本的には男性の装飾と変わりはないが、次の二点において異なる。一点目は女性の胸飾りにはブタなどの動物の牙を用いたものはなく、その代わりに長径が二〇センチメートルほどもある大きな二枚貝の一片を中心に、コヤスガイなどの他の貝をふんだんに用いた飾りが目立つことである。パプア・ニューギニアは独立以前まで貝貨が流通し、また婚姻の際、姻族に対する婚資として貝がブタなどとともに欠かせぬ対価物質であったのである。現在は貨幣経済が全域にわたって浸透しているが、その通貨単位であるkina（キナ）及びtoya（トヤ）はともに語源が貝に由来する。

二点目として、男性が手斧や槍、弓矢などの武器類を携えるのに対し、女性はそれらを一切所持しないことである。男性は武器類を手に個々の集団のリズムに合わせて、歌い、あるいは雄叫びをあげながら行進するものが多かったが、女性は歌う、もしくは、定位置に固定して静かにリズムをとりながら歌う集団が多かった。また、男性と女性の混合からなる集団は皆無に等しく、明らかに性差が伺えた。ただし、中には、子供のみからなる集団構成や、全身をヒトの骸骨模様に塗り、獣の着ぐるみをした森の亡霊なる怪物との間であたかも日本でいう「だるまさんがころんだ」の遊戯のような特殊な装いと方法を取る集団も一グループずつおり、それらは他の集団とは明らかに様式が異なる集団もいた。

（2）ムラのシンシン

次に、筆者等が訪れたマウントハーゲンの、コムカ族のあるムラで行なわれたシンシンについて述べてみる。このムラは、筆者等を案内してくれた現地ガイドの出身ムラであり、またその現地ガイドの経営者が住むムラでもあった。そこはいわば観光客向けに再現された「文化村」の類のものであり、さまざまな儀式や生活がムラの

住人によって再現されている。もっとも、ムラの全員が我々が容易に想像するような「民族的」な衣装をまとっているわけではなく、またその生活を維持しているわけでもない。ただ再現されているだけなのである。

ここにパプア・ニューギニアの新たな観光産業の芽生えを垣間見ることができる。したがって、ここで再現されたものが空間軸に限定され、時間軸に系統をもった事象であると断定はできないが、少なくともその断片が隠れているということを特記して以下に進むこととしたい。

筆者等がムラを訪れるとムラの広場に案内された。そこでちょうどマウントハーゲンショーの時のように、男性の一団がめいめい装飾を施し、四人が横並びで隊をなして広場を巡っている。その一団はおよそ二〇名程であった。特徴的なのは、最前列の二人の装飾が他の構成員よりも入念な化粧と豊富な装飾類を施し、明確な差異が生じていたことである。彼らは年齢的にも集団内において古老的存在であったことから、その差異には何らかの意味が込められているのかもしれない。同様なことは、後列の構成員にも当てはまる。後列になればなるほど、装飾やいでたちに統一感が薄れていき、我々と同じような服装で列に加わっている者、単に歩いている者などが多くなっていくことが伺えた。これらの差異が何に起因し、そして現代社会にどれだけ旧態として留めているのか不明であるが、興味深い。

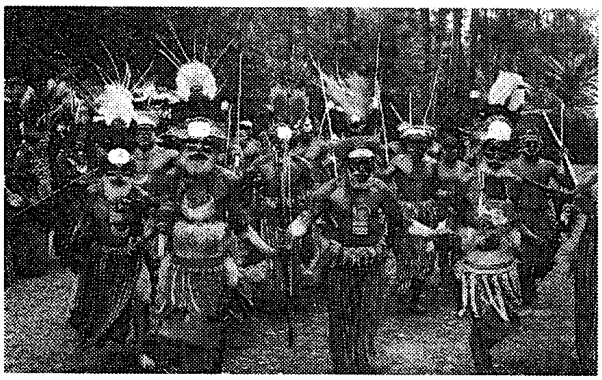

写真4　コムカ族のシンシン

写真5　コムカ族の正装した女達

その反面、広場の脇で一定位置に留まりながらも、一定のリズムで動作と歌を繰り返していた女性の一団は、全体的に装飾や動きも統一的であり、男性と対照的であった。彼女たちはやはりマウントハーゲンショーと同様に、胸元を多様な貝類で飾り、武器類は持たず、手には手持ち用の太鼓だけを両手で叩いていたのであった。

このように、このムラで行なわれたシンシンは、マウントハーゲンショーでなされた個々の集団のものと規模の点においてほぼ同種であったが、男性の装飾においてマウントハーゲンショーのものとは異なっていた。これは主にマウントハーゲンショーが参加集団を選出するという参加方式であり、またあらかじめ準備期間があるの

と違い、ムラの場合は観光客による需要が生じてから順次準備を行なうことや、分配される物品等の多寡によるものが影響している可能性がある。

また、ここで行なわれたシンシンがこのムラの構成員のみから成り立っているのかが釈然とせず残念であった。

(3) アサロ渓谷のマッドマンショー

アサロ渓谷のマッドマンは白色から灰白色の泥を、繊維で作られた輪郭部に塗り固めて作った面をかぶり、同じく泥で全身を塗った男たちによってなされるシンシンである。

その泥の面は人形ではなく、森に棲む動物や霊をモチーフにしたものである。したがって、面には目、鼻、口が施されているものの、必ずしも左右対称についているわけではなく、また動物等の角がついている面もある。また、総勢六人、手には弓、槍、棒状の叩き具、生葉のついた木の枝を持ち、指には指と同じくらいの太さのタケをはめて、その先端を斜めに削ぎ落として動物の爪を見立ている者もいる。

マッドマンは他の部族に見られるような、「豪華さ」や「派手さ」などの人目を引く要素はないが、ある意味不気味さを伴なっているといえる。このようなマッドマンの風貌の由来はいくつかあるが、その中で最も一般的に流布しているものに、敵を脅かすことに意味があるとする説がある。彼らが敵の部族と戦う際に、その風貌が死

霊として敵の部族を威嚇するというのである。確かに、我々が見聞した部族のシンシンの装飾や立ち居振る舞いは示威的であるのに対し、このマッドマンは明らかに他を魅了するためのものではなく畏怖させるものであったように思われる。我々外部の人間が感じるイメージと現地の人間が感じるものが相異することを考慮しても、他のシンシンと区別されるものではないだろうか。

写真6　アサロ渓谷のマッドマン

さて、マッドマンのシンシンはその登場から始まる。筆者等が案内された観客用の小さなベンチに座ると、しばらくして、三〇メートル程離れた、枯草を幾重にも束ねて作られた「幕」から既述の風貌を施した五人のマッドマンが現れる。マッドマンのシンシンは静寂の中にある。時折両指にはめられたタケの「爪」をカチカチと鳴らす音と枝と枝をこすり合わせる音以外に、そこに一切の音はない。無音に近い状況下で、一歩一歩迫り来るのである。

この一連の動作の中を観察する限り、このシンシンは異様な光景と映るかもしれない。それは、他のシンシンが自己や集団を主張するのに衣装や装飾などに派手さや豪華さにとかく注意を払うことと

比較しても容易にわかる。マッドマンはやがて我々の前まで近づくと、手にしていた武器類で威嚇してその全てを終わりとするが、このシンシンが少なくとも婚姻交換や贈与交換などの、個人の威信を高揚させる類のものではないことは確かであるように感ぜられた。

3　小結

今回、筆者等がパプア・ニューギニアに赴いた理由の一つは、シンシンにどのような精神世界が反映されているかについて、まず実見することから始めるためのいわば下準備的なものであった。一週間という限られた滞在期間の中で見聞したシンシンの絶対量が不足しており、またその多くが観光客を相手とする、いわば隔絶された関係下において、どれだけの情報量を果たして得られたのかという疑問もあるものの、少なからずの成果を上げることができた。今後は、こういった現地で得られる情報をいかに適正に我々の求める研究に翻訳していくかについて、さらなる知見を得ながら進めていきたい。

（井出浩正）

六　将来的研究の展望

近年の考古学的研究の発達により、縄文時代は、かつて考えられていたほど未開ではなく、むしろ社会の複合度がある一定レベルに達しており、様々な社会組織が複合化する社会であるとの認識が高揚している。それは、集団レベルの協業を前提にしないと理解できないような大型の遺構が相次いで発見されたり、特別な使途を思わせる立派で手の込んだ遺物が発見されるからである。それらは普通、平等社会とされる一般的な狩猟採集民社会には登場しない遺構・遺物であり、縄文社会は既にその段階を脱却していると推測されるのである。親族組織としてのまとまりや、居住を中心にした地縁的まとまりとしての集落の様態が明らかになるにつれ、これら血縁関係や地縁的関係、あるいは結社的組織を基礎として、縄文社会の複合性が高まっていくことが推測されるようになっている（高橋二〇〇三）。

さらに、縄文時代の社会的階層化がどの程度進展していたかの問題は、新たに登場した今日的な研究課題である。一般的狩猟採集民の形成するシンプルなバンド組織（平等社会）から部族社会を経て、首長制社会にいたる、長い人類史上の社会進化の過程を、「階層化過程にある社会」（Transegalitarian society）（Hayden 1995）として捉えると、従来の仮説のように、縄文時代を平等社会として位置付け、弥生時代の首長制などの階層化社会にいきなり飛躍すると考える事は理論的に困難になる。その過程中に、社会の複合化と階層化が進展する社会進化の複数の階梯を認めざるを得ないのである。

狩猟採集社会と目される縄文社会が、初期的とはいえ、既に階層化への歩みを開始した社会であることが確認されれば、それは重要な発見であり、人類社会進化史の中であらためて縄文社会を正しく

位置づける必要がある。

おわりに

今回の民族調査は、縄文時代の社会的複合性・階層性の程度について、評価すべき参照例として選択された調査である。もちろん、パプア・ニューギニアだけが選択肢のすべてではなく、メラネシアの中でも地域により、複合度が様々に異なる社会があるし、ポリネシアやミクロネシアなど、社会進化の程度の異なった例が正に「実験室」のように存在する。それらの民族誌を参照せずして、縄文社会の階層化過程は理解できないことは言うまでもない。その意味で今回の調査は社会階層化過程研究の最初の一ページといえる。

今回は社会の複合化・階層化が出現する構造的基盤としての親族構造や地縁的構造、さらに階層化を推進する契機としての祭祀を調査した。

しかし、マウント・ハーゲン地域は、すでに欧米やオーストラリア資本との接触を介して、経済的側面のみならず、文化や社会面において大きく変容している。シンシンと称する地方を挙げての祭祀も、本来一連の儀礼的プロセスの中から、集団で踊り歌う部分だけを切り取って観光用にアレンジしたものである。現在はその部分だけが一人歩きしている。その意味では、接触以前の祭宴をそのままの形で留めたものではない。したがって、祭宴・儀礼全体の脈絡の中で位置づけを再構築する必要がある。

生業の柱である農業は、特に高原地帯などでは未だに焼き畑農業に依存する前近代的な農法が採られ、タロイモ、サツマイモなどの日常的な作物が栽培されているものの、サトウキビ、コーヒーなどの換金作物が栽培されおり、この面においても確実に外部の市場経済に巻き込まれているのである。

同様に親族関係も大きく様変わりしていることも確かであろう。今回の調査で明らかなように、リネージやクランなど親族組織をベースに各部族が成立し、互いに婚姻や儀礼などを通じて紐帯を築き上げるものの、現代では自由恋愛が一般化し、従来の婚姻体系が変革している事も窺われる。また、親族を束ねるクランの長は、かつて名声を備えた血縁組織や地域の顔、ビッグ・マンであったが、現代の長は選挙で選ばれて職務を司る役職者になってしまった。接触時とは大きく様変わりをしている。クラン・部族間の社会的関係や闘争なども大きく変容しているに違いない。今後、これらの変容の過程を理解しながら、縄文社会の復元に役立てる必要がある。

なお、本調査の一部、報告論文の一部は早稲田大学特定課題研究費および鹿島財団研究助成金の援助を受けた。明記して謝意を表したい。

（高橋龍三郎）

参考文献

安斉正人　二〇〇二「北方猟漁採集民の社会」『縄文社会論』（下）同成社

石川栄吉、越智道雄、小林泉、百々佑利子(監修) 一九九〇『オセアニアを知る事典』平凡社
ヴォルフ・キーリッヒ／米山俊直、野口武徳、山下諭一(編訳) 一九八一『世界の民族と生活1 オセアニア・フィリピン』ぎょうせい
E・エバンズ＝プリチャード、梅棹忠夫、畑中幸子(監修) 一九七八『世界の民族1 オーストラリア・ニューギニア・メラネシア』平凡社
牛島巌 一九八七「ウルシー環礁モグモグ島の集団構成」、牛島巌(編)『象徴と社会の民族学』雄山閣出版
大塚柳太郎 二〇〇二「ニューギニアという地域、そして人々」『ニューギニア—交錯する伝統と現代』京都大学学術出版会
柄木田康之 一九八七「威信・精液・穢れ」、牛島巌(編)『象徴と社会の民族学』雄山閣出版
小泉潤二 二〇〇一「フィールドワーク」、山下晋司・船曳建夫(編)『文化人類学キーワード』有斐閣双書〔第九刷〕
後藤明 二〇〇一『民族考古学』勉誠社
M・D・サーリンズ 一九七六「プア・マン リッチ・マン ビッグ・マン チーフ」、M・サーリンズ、E・サーヴィス／山田隆治訳『進化と文化』新泉社
塩沢町立今泉博物館編 一九九五『パプアニューギニアの土器と土製品 収蔵品目録Ⅰ』塩沢町立今泉博物館
塩沢町立今泉博物館編 一九九七『パプアニューギニアの祖霊・精霊像 収蔵品目録Ⅱ』塩沢町立今泉博物館
塩沢町立今泉博物館編 一九九九『パプアニューギニアの仮面 収蔵品目録Ⅲ』塩沢町立今泉博物館
塩沢町立今泉博物館編 二〇〇〇『パプアニューギニアの武器と神像類 収蔵品目録Ⅳ』塩沢町立今泉博物館
須藤健一 一九八九『母系社会の構造—サンゴ礁の島々の民族誌—』紀伊国屋書店
高橋龍三郎 二〇〇三「縄文後期社会の特質」、大学合同考古学シンポジウム実行委員会編『縄文社会を探る』学生社
武光誠 二〇〇三『大和朝廷と天皇家』平凡社〔平凡社新書〕
豊田由貴夫 一九九三「シンシン」、『季刊人類学』六三号、千里文化財団
豊田由貴夫 一九九三「パプアニューギニアの文化とシンシン」、『シンシン』第三書館
畑中幸子 一九八九「パプアの歴史と風土」、天理大学、天理教道友社(編)『パプアニューギニア—ひとものこころ・天理大学附属天理参考館所蔵・第三期第一巻—』天理教道友社
林勲男 一九九四「パプアニューギニア、ベダムニ族 成人儀礼の赤い鳥」、『季刊民族学』六八号、千里文化財団
J・A・バーンズ／笠原政治訳 一九八一「ニューギニア高地におけるアフリカン・モデル」、村武精一(編)『家族と親族』未来社
松沢員子 一九八三「女性とフィールド・ワーク—その現実と葛藤—」、牛島巌・松沢員子(編)『女性の人類学』〔現代のエスプリ別冊 現代の人類学5〕至文堂
八木康幸 二〇〇一「伝統の変容と地域文化のゆくえ」、パルテノン多摩編『「伝統」の創造と文化変容』多摩市文化振興財団
山本泰・山本真鳥 一九九六『儀礼としての経済—サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ—』弘文堂
吉岡政徳 一九九三「ビッグマン制・階梯制・首長制」、須藤健一・秋道智弥・崎山理(編)『オセアニア② 伝統に生きる』東京大学出版会
吉岡政徳 一九九八『メラネシアの位階階梯制社会—北部ラガにおける親族・交換・リーダーシップ—』風響社
吉田集而 一九九二『性と呪術の民族誌—ニューギニア・イワム族の「男と女」—』平凡社
Godelier, M. 1982 *The Making of Great Men*, Cambridge University Press
Goldman, I. 1955 "Status Rivalry and Cultural Evolution in Polynesia", *American Anthropolosist* Vol.57

Hayden, B. 1995 "Pathways to Power: Principles for Creating Socio-economic Inequalities", in T.D. Price and G.M.Feinman(eds.), *Foundations of Social Inequality*, Plenum Press

Hayden, B. 2001 "Fabulous Feasts: A Prolegomenon to the Importance of Feasting", in M.Dietler and B.Hayden(eds.), *Feasta*, Smithsonian Institute Press

Kirch, P.V. 1984 *The evolution of the Polynesian chiefdoms*, Cambridge University Press

Meggitt, M. 1971 "The Pattern of Leadership among the Mae-Enga of New Guinea", in R.Berndt and P.Lawrence(eds.), *Politics in New Guinea*, University of Western Australia Press

Renfrew, C. 1991 Archaeology: Theories Methods and Practice, Thames and Hudson

Sahlins, M. 1958 *Social Stratification in Polynesia*, Cambridge University Press

Strathern, A. 1971 "The Rope of Moka: Big-men and Ceremonial Excange in Mount Hagen, New Guinea" Cambridge University Press